

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

| | |
|-------|----------------------------|
| 施設名 | 太陽の子潮見保育園 |
| 施設所在地 | 東京都江東区潮見1-28-8ベイフレール潮見2、3階 |
| 法人名 | HITOWAキッズライフ株式会社 |

1. 活動のテーマ

<テーマ>

自然と触れあう

<テーマの設定理由>

(テーマに関する子どもの興味関心、園の特色など)

・戸外活動の中で、身近な虫や草花に興味を持ち始め、じっくりと探索しながら実際に触れたり観察したりする姿を見て、もっと探求していきたいと感じた。
戸外だけでなく、室内で観察できるようダンゴムシを飼ったり道端の草花を生けて日々観察したり触れることを楽しんでいる。
クラスだけの探索では限りがあり、地域に根付いた専門の方と一緒に虫や草花探しを楽しめるような計画をしていきたい。
また、木の実や草花を使って色水作りや作品作りなどの遊びを取り入れながら植物を身近に感じられるような取り組みをしていきたい。

2. 活動スケジュール

4月～5月 こどもたちとの戸外活動の中で興味のある物を探る。

6月 ・ヤマモモの実を使った色水あそび・染紙

・身近な公園に詳しい講師を探し、依頼する。

・保育室で観察できるような植物（ハーブやオジギソウなどを購入）

7月 講師（第1回）と一緒にさざなみ公園内ビオトープを探索し、春夏の植物や生き物について教えて頂く。

9月～10月 好きな草花を採集し、アートにする。

11月 講師（第2回）と一緒にさざなみ公園内ビオトープを探索し、春夏の植物や生き物について教えて頂く。

12月～2月 霜柱やビオトープにできた氷、雪など冬の自然に触れる。

実際に触れてみて冷たさを感じたり、自然の不思議さを感じる。

通年 ・メダカ、ダンゴムシやチョウの幼虫、カブトムシ、バッタ、カマキリなど身近な生き物に触れ、観察したりお世話をしてみる。飼い方を図鑑で調べ、保育室で飼育してみる。顕微鏡、マイクロスコープ、虫めがねを使い、採取してきた虫や草花を観察する。

戸外活動で虫取り網や飼育ケース、図鑑、虫めがねなどを持参し、じっくりと観察することを楽しむ。

・保育室で育てている植物の水やり、世話を子どもたちと一緒にしながら、匂いを感じたり成長を楽しむ。

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

（活動のためにどのような環境を設定したか、準備した素材や道具）

・保育室に植物、生き物コーナーを設定。

テーブルにダンゴムシ等飼育している飼育ケースと、虫や植物に関する図鑑・虫眼鏡を設置。

顕微鏡やマイクロスコープは担任が管理し、虫の羽など細かいものを見る時に使用した。

絵本コーナーの棚の上にハーブ（『カレープラント』というカレーの香りがするものと、『レモンバーベナ』というレモンの香りがするもの）やオジギソウ・多肉植物を設置。いつでも匂いを嗅いだり触れても良い環境にした。

その他観葉植物なども設置。保育室にいても植物が身近な存在になるような環境設定を心掛けた。

・ロッカーの上にメダカを飼育。

・草花アートができるよう、指や手で描ける絵の具を購入。

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

- 1.子どもたちの興味を探る：身近な公園を探索しながらどんなこと・物に興味を示すのか、何が好きなのかを探る。虫を捕まえたり、草花を摘んでみる。
- 2.実際に自然と触れ合う①：ヤマモモが落ちているのを見て触れているうちに手が赤く染まることに気付く。潰してみたいという姿があり、袋に集めたヤマモモの実を潰して色水にして紙染めを行う。その後、草花や木の実を収集するたびに「水を入れてみたい」という声が上がリ、どんな色が出るかを試してみたり、手だけでなくすり鉢とすりこ木を使って潰し試してみる。潰すことで匂いを感じたり、素材の違いや水の量によって色の違い・濃さ・実の中に種があることなどを知る。
- 3.実際に自然と触れ合う②：ダンゴムシやカタツムリ・テントウムシを見つけると「持って帰りたい」と子どもたち。保育室に持ち帰って飼育してみることになる。それぞれの生き物の飼い方の本を使って飼育の仕方や何を食べるかなどを知り、自分たちで餌探しをしてあげたり世話をする。水や餌が乏しくなると元気が無くなることに気付く。
- 4.地域のプロに教えてもらう：担任だけでは虫や草花・実の種類や生態等が分からず、子どもたちに教えるにも限界があり、地域の公園の自然に詳しい方に講師として依頼することにする。講師と共に親しみのある公園に出掛け、夏は昆虫などの生き物を中心に、秋は植物を中心とし探索しながら名前や特性を教えてもらい、昆虫の全体像だけでなく足や目等の部位を観察したり、動きの違いに気付く。
- 5.クラスでの探索：講師に教えてもらった植物や生き物を再度クラスの散歩でも見つけ、子どもたちと振り返る。様々な生き物や草花の名前に興味を示したり、探索活動の際には図鑑を手に見比べてみたいという気持ちが芽生える。
- 6.日々自然に親しむことで、保育の中のおはなしごっこでは、登場人物として散歩や保育室で親しんできた虫や果物の名前が出てくる。
どんな色や形をしていたか、どんな動きをしていたかを思い出しながら演じる。
- 7.子どもたちの自然に対する探究心や表現の仕方についてスタッフ同士で振り返り、担任以外のスタッフや保護者に発信する。

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

(活動の内容、活動中見られた子どもの姿、保育者との関わり等)

始めのうちは虫が好きな子は1名のみだったが、その様子を見て他児も見つけてみたい、触ってみたいという気持ちが湧いてきて虫探しが広がってきた。触れられるようになるととても嬉しそうに報告する様子も見られた。そのうちつかまえた生き物を「持って帰りたい」という姿も出てきて、保育室で飼ってみることになった。虫の観察コーナーを設定し、そこに昆虫図鑑・虫の飼育の仕方の図鑑を設置。捕まえた生き物と同じものを図鑑の中に見つけると「これ同じだね」と発見した喜びをスタッフに伝えていた。

図鑑で調べ、「ダンゴムシにこれを入れるみたいだよ」「葉っぱ食べるんだって」と見たことを気付いて知らせたり、散歩に行った際に「ダンゴムシにあげるんだ」と石や葉を摘み取り、保育室に帰るなり、飼育ケースに入れてあげる姿もあった。時々飼育ケースを覗き、「拾ってきた葉っぱ食べてくれた」と嬉しそうな様子もあった。生き物を飼うことを通し、霧吹きで水をあげたり、枯葉を交換するなど、世話をしないと死んでしまうということに気付いたようだった。

また、図鑑を散歩先に持っていきたいという意見も見られ始め、同じ生物・植物でなくても、「これ、ここが似てるよね」「同じの見つけた」と似たものを図鑑の中で見つけれられた喜びを感じられるようになり、植物や虫への興味がさらに広がってきた。

植物を観察する中で、身近な食べ物に例えたり、匂いを嗅ごうとする姿がよく見られていた。赤い実一つとっても少しづつ色あいや丸みが違い、子どもたちは「これはトマトみたい」「ブドウみたい」などなるほどと思えるような表現で、観察力に感心した。



5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

取り組み前の探索活動は、子どもたちにとって虫や植物を収集することが楽しいこと、保育士は「今ここでやると手や服が汚れちゃうから」などを理由に子どもたちの提案を止めてしまっていたようなこともあった。

しかし、すくわくの活動を通して「この実を潰してみたい」「この花を水につけてみたらどんな色になるんだろう」「ダンゴムシを持ち帰って部屋でもじっくりと観察してみたい」という主体性や探求心が芽生えてきた子どもたち。そして、子どものやってみようを止めずに保育士も一緒になって楽しむことで、新たな発見が生まれたり、子どもたちはこんなことを考えているんだなと感じられることも多くあった。また、植物を育てたり生き物を飼うことを一年通して継続することができ、普段から自然と共に生活することができた。同じ保育室でも動植物がある環境の方が子どもたちも安心するようで、飼育コーナーや観葉植物の周りで遊んでいることも多々見られている。

地域の生き物や植物に詳しい方に講師として来ていただくことで、普段の散歩ルートでも保育士と子どもたちだけでは見つけられないようなものを紹介していただいたり、実際に捕まえて触らせてもらったりととても貴重な体験となった。その経験は1回きりでなく、後日クラスでの散歩でも「ここには〇〇があったよね」「また見つけよう」と子どもたち主体的な活動にもつながっていった。

子どもたちのやってみようという気持ちを追求していくことで、次なる疑問を抱いたり、発見した喜びを周りに共有する事で心の成長にも繋がった。今後も一人ひとりの疑問ややりたいことをそれぞれ実現できるよう保育士が聞き取ったり感じ取ったりすることが重要だと思う。「先生、やってみよう」と言えるような環境作りをし、子どもたちの探求心を育てていきたい。